

# 真夜中のラジオ

大島 行雲

何もする気が起きない。

仕事で失敗をしてかした。上司に怒られるほどではないが、褒められる事とは程遠い。自棄酒と言つかストレス解消の為に飲もうかと思つたが、いつもの飲み友達は誰もが残業で会えないと言う。仕方ないと思うからこそ、余計に不満は溜まる。誰が悪い訳でもなく、自分が悪いから腹が立つ。残暑の暑さも過ぎ去つて、漸く過ごしやすい季節が訪れ、体は絶好調の筈なのに、心は絶不調だ。

最近、パツとしない。昇進試験が間近だが、仕事を辞めようかと真剣に考え始めていた。自分は向いていないのではないかと思えてならない。思い返せば返すほど、他人に誇れる様な業績は何一つとして残していない気がする。同期の友人は社内では有名なほどのホープとして見込まれている。ピカソやブラックは二十代でキュビズムの境地に到達した。

取り残されている。成長も進歩もできぬまま。

それなら、努力すればいい。でも、何を？

世間では拉致被害者の帰国の話題でもちきりだ。それを見て、彼は半世紀前の朝鮮人強制連行を思う。彼らは無事に祖国に帰れたのだろうか。

世の中は、ぐるぐると回っている。悪循環というメビウスの環を。いくら仕事をしてみても、いくら努力をしてみても、所詮、何も変わらないどころか他人を余計に不幸にしている気さえする。思いやりのある世間は彼らを批判せずに微笑んでくれる。

しかし、問題は解決しない。アメリカでは顔の見えぬ狙撃者が、無差別に人々を撃ち殺している。学校の傍で十三歳の少年が叔母の目前で撃たれ、瀕死の重態だと言う。

別に彼には関係のない事だ。何も社会的な事ばかりで悩んでいる訳ではないが、そんなニュースを見る度、無力感が増していく。何をしてみたところで、それを越えたところで人の一生は決まってしまう。安全な筈の観光地でP4爆弾が市民を襲つ。飲み友達には会えない。彼は優秀な社員ではない。優秀な人間でもない。

もう深夜だと言うのに、夕食を食べていない。外食する気力も自炊する気力もない。そもそも何かをする気力が全くない。こんな時、ストレス解消に聞くCDは、プレーヤーが故障していて聞けない。明かりも点けない暗く静かな部屋の中、冷蔵庫の音だけが聞こえてくる。

今夜、何度目か数え切れない溜息をつく。何もする気は起きず、それでいて、何もしないでいる事に耐えられない。何かから逃れたくて、普段は聞きもしないラジオのスイッチを押した。

どこかで聞いた声が入った。落ち着いた声。芸能通の彼だったが、いくら考えてみても該当する顔が浮かばない。

『よく一緒に映画を観に行きましたね。彼、ヴィム・ヴェンダースが好きで。』リスボン物語だとか』

吉岡。学生時代の旧友だ。映画好きの彼は時間に余りある学生時代、年間百本以上もの映画を観た。その多くに付き合っていた親友が吉岡だ。卒業後も何度か会っていたが、仕事が忙しくなり始め、通勤もあって、会う回数が減り、いつしか年賀状の遣り取りだけの関係になってしまった。そう言えば、ラジオの仕事をしているとか何とか、いつだかの年賀状に書いてあったのを思い出す。

あの頃は良かった。最近、そう思う。そう思うのは今が良くないという事で、そうはなりたくないと、若い頃、強く思っていた。今でも、そう思っているが、それでも、今、あの頃は良かったと思う。そう思ってしまう自分が後ろ向きな気がして嫌だった。

自分は、ぐるぐると回っている。悪循環というメビウスの環を。昔から彼は吉岡に憧れていた。現実的でありながら夢を持ち、自分というものを忘れず、それでいて他人との付き合いも上手くて誰からも好かれていたものだ。彼は吉岡みたいになりたいと、ずっと思っていた。そして、彼は何もする気が起きず暗い部屋に寝転がり、吉岡は夢を実現してラジオでDJをして

いる。

『すごいな〜って思ってしまったよ。彼、学生の頃から、若いのに、なんていうか、すっかりしててね。安定感があるって言うんですかね。あんな風になれたらって、ずっと思ってたんだけど、私はダメだな〜って』

え？

世の中は、ぐるぐると回っている。

自分も、ぐるぐると回っている。

あの人も、ぐるぐると回っている。

立ち上がって、明かりを点けた。